

苗木を植える人

後藤 文男(本学教職研究科准教授 国語教育学)

私は、故白川静立命館大学名誉教授が築き上げた古代文字学をベースとした漢字教育を教育現場に普及させるための活動を行っています。漢字は「筆順」や「とめ・はね」に気をつけながら繰り返し書いて覚えるしか方法はないと思っておられる方も多いかもしれませんが、白川先生は漢字にはもう一つの覚え方があるとおっしゃいました。それが、漢字を「成り立ちとつながりで学ぶ」方法です。今日はその一例を紹介します。



(藝 甲骨 3300年前)

まるで絵のような3300年前の古代文字があります。これは「一人の人がひざまずいて木の苗木を植えている様子」を表わしています。この字は、「芸術」、「芸能」、「文芸」などという時の「芸」という字の一番古い形です。正確に言うと、「芸」という字の旧字体「藝」の一番古い形です。「藝」は「艸」と「云」との間に「執(げい)」というパーツが挟まれた漢字で、草かんむりがあるように、もとは「苗木を植える」ことを表わす字でした。

実は現在の「芸」という字から抜け落ちてしまった「執(げい)」というパーツこそが、「苗木を植える」という意味を担っている部分でした。「執(げい)」の左側には「土」が二つも入っています。土をしっかりとかけて苗木を植えたのです。

「藝」は「苗木を植える」ということが最初の意味でしたから、「園藝」という言い方の中に今も原初の意味が残っています。その藝が、「藝術」や「藝事」、「一藝に秀でる」という使い方をされるようになっていくのは、苗木を植えて一人前の木に育っていく時間と一つの藝を磨き一人前になるまでに要する時間とを重ね合わせたからです。長い時間をかけて「藝」を磨き、やがて「一藝に秀でる人」になっていく過程は、木を一人前に育てる長い時間と重なるのです。長い時間をかけて粘り強く育てなければ「一人前」になれな

いのは、「植樹」も「藝」も同じです。

人が苗木を植えている「藝」の古代文字には、どことなく愛おむように苗木を大切に扱っている人の思いを感じます。苗木を植えてから成長するまで粘り強く育てていくことができるのも、大事に成長させてやろうとする苗木への思いがあるからです。それも「藝」を育てることとつながっているように思います。成長を急いで、水をやりすぎても、肥やしをやりすぎても、寒すぎても、暑すぎても苗木は丈夫に育ちません。適度な「熱」=愛情や温度が必要なのです。成長に合わせた適度な「熱」が加われば、苗木はすくすくと育つことになります。

この「熱」という字が、「藝」の中にある「執(げい)」と「... (れっか)」との組み合わせだとわかれば、木を成長させるために必要な「ねつ」を表す字であることがわかります。適度な「熱」がありさえすれば、やがて木はすくすくと「勢い」をつけて育っていくこととなります。「勢」という字もまた「執(げい)」と「力」との組み合わせからできた字なのです。木は適度な「熱」があれば「力」を得て勢いよく伸びていきます。

このように「藝」と「熱」と「勢」という字は、木を植えることにつながる一連の字なのです。「藝」と一緒に「熱」と「勢」とを学べば、心に刻んで忘れない覚え方になります。

このことがわかると「藝」という旧字体の中から一番肝心の「執(げい)」というパーツが抜け落ちてしまったのはいかにも残念なことだと思いませんか。今の「芸」の字では、「熱」という字や「勢」という字との関係がわからないだけでなく、肝心の魂が抜かれた字になってしまっているのです。

木を植えて一人前に育てていくためには、粘り強い努力と適度な「熱」が必要なように、子どもを育てる教育の世界でも同じことが言えます。かつて、教員を養成する大学に「学藝大学」と名前を付けたのはとても

納得がいくネーミングでした。「苗木を育てる人」になるための「藝を学ぶ」学校だったからです。しかし、今は「東京学芸大学」を除きすべて「教育大学」になってしまいました。「教育」の「教」は、成り立ちから言えば、子どもを鞭でしつけるという意味です。どちらがふさわしいかもう一度考え直してもよいのではないかと思ったりします。

R RITSUMEIKAN